書　評

宮本健市郎
『空間と時間の教育史
――アメリカの学校建築と授業時間割からみる――』
（東信堂、2018 年、300 頁）

添田　晴雄
大阪市立大学

学校建築という空間構成の実態と、時間割という時間構成の実態を手がかりにすることによって、学校教育の歴史的な実態とその背後にあった教育観を考察することを目的とした刺激的な著書である。

学校建築の平面図をふんだんに掲載した教育書としては、古くはHenry Barnard の *School architecture; or, Contributions to the improvement of school-houses in the United States*, 2nd ed.（A. S. Barnes & co., New York,1848）などがあるが、教育思想と学校建築という空間構成を積極的に関連させて論じたものではなかった。

学校建築の平面図の変遷を学校観やカリキュラム観の歴史と関連付けようとしたのは、Malcolm Seaborneの *The English school : its architecture and organization 1370-1870*（Routledge and Kegan Paul, London, 1971）が嚆矢である。彼は大量の学校建築の平面図と写真を収集し、その物理的変遷から、イングランドの学校が、教会の一部として始まり、それが世俗化して独立した変遷の様子を、学校観やカリキュラム観の変遷と関連付けて考察したのである。

『空間と時間の教育史』は、Seaborne以来の、学校の空間構成史と学校文化史を往還する本格的な研究書である。本書は、アメリカの学校を対象としており、空間構成史に加えて時間構成史からも教育実践の実態に迫っている。

本書は、校舎の変遷を、大きく教会モデル（19世紀前半）、工場モデル（19世紀末から20世紀初頭）、家庭モデル（20世紀半ば）に分類している。教会モデルの校舎はそのほとんどが一教室学校であり、その構造は教会の形式と類似しており、教壇に立つ教師が神に代わって権威をもって教育空間を支配していた。工場モデル校舎では、教会の影響は薄れ、大都市の発展にともない、大規模な校舎が設計された。ひとつの校舎に多くの教室が配置され、多様なカリキュラ

ムに対応した特別教室、講堂、運動場などが整備された。そして進歩主義的な教育観に基づく子どもの活動の多様性や連続性に配慮した構造が模索されるのは、家庭モデル校舎の時代であった。

その中で、進歩主義教育の文脈で語られることが多いゲーリー・プランが、実は工場モデル校舎を使って普及したという本書の指摘は示唆に富む。本書も引用しているように、インディアナ州ゲーリーで行われた実践は「デューイの教育哲学を応用した最初の、首尾一貫した、誠実な試み」であり、デューイ自身もそれを絶賛している。その「働き・学び・遊ぶプラン」と呼ばれていたゲーリー・プランを実現させるために、ゲーリーの公立学校は、通常の教室だけではなく、講堂、作業場、理科室、美術室、遊び場、運動場などが整備されていた。

ニューヨークにおいて、ゲーリー実践を模範とした「ゲーリー・プラン」の学校建築の導入が検討され、それがのちに「プラツーン案」の学校建築としてニューヨークのみならずアメリカの都市に広がった。その普及に貢献したのが、デューイの教育理論を学んだバロウズであったと本書は指摘している。しかし、「バロウズの意図とは違って」、ゲーリー・プランが経費節約の手段として機能していたのだと本書は論考している。まず、理念として「働き・学び・遊ぶプラン」を支える校舎には多様な特別教室が必要であることが唱えられる。当時、小さな学区の中に小規模の学校が設置されることが多かったが、小規模校に多様な特別教室を設置することは現実的ではない。そこで、理念を実現化するために、学区の統合、学校の統合が行われることになった。しかも、「進歩主義教育の影響を受けた」はずの校舎で行われていたことは、各特別教室の稼働率を高めることであった。「子どもが学習空間を自ら構成する自由は認められて」おらず、子どもは「教師が作成した教育のプログラムにしたがって」諸施設の間を動くことを強いられた。それは、「校舎中心の教育」であり、「進歩主義教育者が批判した教科中心の教育でもあった」と本書は指摘している。

一方、時間割による時間編成については、コモン・スクールが普及し始めた19世紀前半、工業化が進展し義務教育が確立した19世紀後半、進歩主義学校が普及する19世紀末から20世紀初頭の3つの時期に分けて考察がなされている。本書によると、コモン・スクールの時代の時間割には細かな記述がなく、時間の使い方は教師の裁量に委ねられていた。それは、教師に神の代理としての権威が認められ、学校の秩序を維持することが教師の主要な仕事であったからと説明されている。このような教師の権威は19世紀末には失われ、教師は時計と時間割を媒介にして教育管理職によって管理される側の立場となる。時間割は細分化され、短時間の活動が次々と展開されるようになっていた。しかし、19世紀末から20世紀初頭にかけての進歩主義学校の時間割では、細かな時間の区切りがなくなって大ブロック式になっており、教科ではなく子どもの活動の種類によって時間割が編成されるようになっていた。また、時間割編成に子どもが参加するようにもなっており、時間割編成における教師の専門家としての裁量権の拡大があったとしている。

ただし、時間割の説明の中で、recitationの訳語として「口頭教授」「暗誦」が一貫して使われていたが、recitationは、時代によっては単に授業一般を指す場合もあり、混乱を招く箇所があったことは残念である。

しかし、それは些末なことであり、空間編成の変遷および時間編成の変遷をめぐる本書の論証は、それぞれ説得力があり、それは大いに称賛されるべきである。一方、両者を付き合わせてみると、子ども中心の理念を実現させる家庭モデル校舎の出現が1940年であるのに対して、進歩主義教育の理念を反映させた時間割が19世紀末から20世紀初頭、つまり、工場モデル校舎と同じ時期に普及しているという、空間構成の転換と時間割編成の転換の時期に違いがあることに気づく。とくに、「ゲーリー・プラン」の学校では、校舎は工場モデル、時間割は進歩主義教育仕様、といったことが同時に並立していたようである。これについて著者は「残された問題」のひとつとして、「進歩主義教育学が孕んでいた矛盾」としている。しかしながら、評者はここに、教育現場の教師の「したたかさ」を読み取った。確かに、進歩主義教育の理念を反映した「働き・学び・遊ぶプラン」が、経費節減のための学区の統合や学校の統合の正当化のために利用されたことは事実である。工場モデルの校舎は、子ども中心の教育を実践するには不都合な側面がたくさんあったであろう。当時の教師の不平不満も容易に想像できる。しかし、現場の教師たちは、与えられた環境をせいいっぱい活かしながら、時間割を工夫し、子どもの活動を中心に据えた実践を模索しようとしたのではないかと考えられる。もちろん、これは評者の

仮説に過ぎず、文献による論証が必要である。しかし、本書の優れているところは、空間と時間の物的証拠を提供することにより、その空間と時間の中で現実に格闘していた教師や子どもの姿を想像しながら具体的に歴史上の教育事象を考察することを可能にしている点である。歴史研究は、ともするとテキスト文献の分析を偏重してきたが、本書は、図面や時間割といった史料も駆使するという研究方法のあり方を提唱している点で、教育史研究に一石を投じた好著であると言える。